

第16話 足利将軍の滅亡

しだいに近畿の諸国を平定して、信長の威名がますます高くなると、
 将軍義昭は自分の地位に不安を感じて、信長を除こうとした。しかし、
 却って逐われて、室町幕府は名実共に亡ぶ。

永禄12年4月3日、織田信長は皇居の修理を始め、初めのうちは自分も工事の監督をしていたが、
 まだまだ平定しなければならないところが、近畿の諸国を始めとして、全国に多かったので、工事の監督はこ
 れを造営奉行らに委し、自分はその翌5月11日に京都を立って、岐阜に帰った。

そして8月の下旬、彼は兵を率いて先づ隣国の伊勢に向った。

伊勢の北畠氏

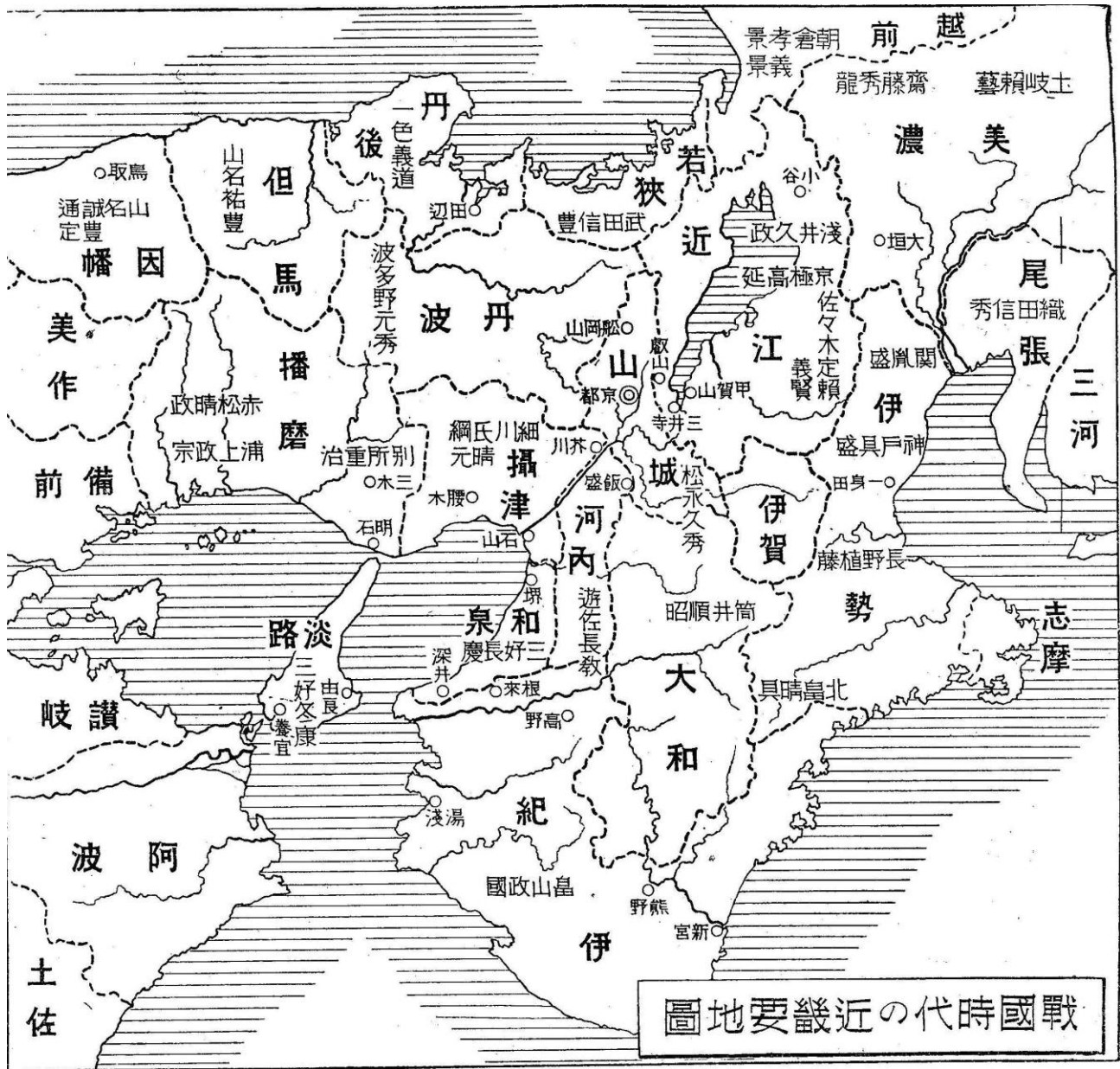
そのころ、伊勢には国司の北畠具教が勢力を張っていた。北畠氏は、吉野の朝廷の忠臣北畠親房
 の子孫です。信長は初め数万の兵を以って、具教を大河内城（飯南郡大河内村）に囲んだが、この城は深い
 谷の奥に位していて、頗る要害堅固でした上に、城兵がよく拒いだので、容易に陥らなかった。それ
 で、周囲の諸道をとことく塞いで、どこからも援兵の来られないようにして囲むこと凡そ60日の後、城
 中の糧食が全く尽きようとした時に、信長は二男の信雄を北畠氏の養子にすることを条件として和議
 を申し込んだ。具教はこれを承知した。

そこで、信長はは囲みを解いて、岐阜に帰って、信雄を伊勢に送った。こうして、伊勢が平らいで北
 畠氏が身方になると、次には目を北陸に向けました。

越前の朝倉氏

其の頃、越前の領主に朝倉義景がいた。朝倉氏は織田氏と同じく、もとは管領斯波氏に仕えて越前
 の守護代をしていたのですが、応仁の乱のころから、進んで守護となって、主家にとって代わったのです。
 義景に至ってから殊に勢力が強くなり、かつて、足利義昭も彼に頼って行ったこともあったのです。と
 ころが、義昭が信長に奉ぜられて将軍になってからは、その本城の一乗谷（足羽郡一乗村。今の福井
 市の東南約14kmのところ）に拠って、敢えて将軍に随おうとしなかった。言うまでもなく、信長は元
 の同僚です（というよりは、むしろ家格が低いとさえ見て賤しめて来ていました）、織田氏の下風に立つの
 をいさぎよしとしなかったのです。

しかし、この時には、信長の威名は殆ど全国に轟いて、豊後の大友氏や備前の宇喜多氏などまで遠く
 信長に使いを送って、その威風に懾服（訳：おそれて従うこと）したのですから、信長としては隣国の朝倉
 氏をいつまでもそのままにしておくわけには行かない。それで、伊勢を平らげた翌年、即ち元亀元年の4月、
 彼は兵を越前に進めて朝倉氏を伐つことにしました。



朝倉氏を伐つ

さて、京都を発した織田氏の兵は、徳川家康の援兵と共に、西近江を経て若狭に入り、行く行く諸城を抜いて越前に迫った。先づ敦賀の東の手筒山城を囲んで、かなりの苦戦の後に、漸くにしてこれを陥るとすぐまたその山続きの金崎城を攻めて、これは苦もなく占領した。こうして勢いに乗じて、朝倉義景の本城一乗谷に向おうとしていると、思いもかけない事が思いもかけない処から起こって、信長にその進撃を続けることを出来なくさせた。

というのは、近江の浅井氏が織田氏との関係を絶ち、遥かに朝倉氏に应じて、信長を挟撃しようとしているという知らせが届いたからです。初め、信長はこれを信じなかったが、再三同じ知らせがつづいて、いよいよそれが事実だとわかると、さすがの信長も驚いた。遠く不案内の敵地に来ていて、前後から猛勢に攻めかけられては、それこそたまったものではないと思ったからです。

浅井・朝倉の同盟

しかし、いったい、どうして浅井氏は織田氏に背いたのか？ 当主 長政の妻は信長の妹であって、両家

第16話 足利將軍の滅亡

きわ ちか しんせき あいだがら
は極めて近い親戚の間柄ですから、一体どうしたというのでしょうか？

しさい のぶなが よしかげ う ぶ か もの
その仔細はこうです。 --- 初め、信長が朝倉義景を討とうとした時に、部下の者らは、「朝倉氏と浅井氏
もと した あいだがら よしかげ いちおう そうだん
とは元から親しくしている間柄ですので、義景を討つには、一応浅井氏にもご相談されたがよろしかろう」
と云ったのです。 しかし信長は、「すでに浅井長政とは親戚の間でもあるし、それに、今度の朝倉征伐は、
のぶなが いっこ しじ てき たいじ いぞん
信長の一己の私事ではなくて、天下の將軍のために御敵を退治するのであるから、もとより浅井氏に異存の
はず むか
あろう筈がない」として、そのまま京都から越前に向ったのでした。

せいぼつ おだに つた き おお おこ ながまさ ひさまさ
ところが、この征伐の事を北近江の小谷城で伝え聞いて大に怒ったのが、長政の父の久政です。 彼
ながまさ いちもんかるう あつ ひとこと さた な
は長政を始め、一門家老を集めて言った。「浅井氏と親しくしている朝倉氏を討つのに、一言の沙汰も無い
のぶなが がんちゆう しょうこ む ほろ のち
のは、信長の眼中に浅井氏のない証拠である。 この向きでは、朝倉氏を滅ぼした後は、きっと、浅井氏
へい む そうい かんけい た れんごう かしん
に兵を向けるに相違ない。 早く織田氏との関係を絶って、朝倉氏と連合すべきである」と。 家臣の中に
むぼう ゆえん と ほんたい ひさまさ がん しゅちよう ま
は、それが無謀である所以を説いて反対した者もあったが、久政は頑としてその主張を枉げなかった。 そ
ながまさ いまさらえんらい めい そむ どうい
れで、長政も今更縁類のよしみのために父の命に背くわけには行かなかったので、ついにそれに同意した。

そこで、浅井、朝倉の同盟となったのです。

のぶなが
しかし、とにかく、すでに両氏の間で同盟が出来た以上は、信長は遠い越前になどにぐずぐずしてはいら
れなかった。 彼はあわてて軍を率いて京都に帰った。

ながまさ のぶなが そむ のぶなが お こうが
ところが、長政が信長に背いて立ったという事が伝わると、さきに信長に逐われて甲賀山中に逃げてい
ろっかくよしかた た えち なまずえ よ
た六角義賢もまた起って、愛智郡の 鯉江城に拠った。

いったい ものさわ のぶなが かえ さら ぐんび ととの
こうして近江は南も北も一帯に物騒がしくなったために、信長は一旦岐阜に還り、更に軍備を整えて、
あらた さんじ おさ し が もりよしなり ながはら さく
改めて近江に向おうとした。 そしてそれまでの暫時の抑えにとして、志賀城には森可成、永原城には佐久
まのぶもり ちょうこうじ しばた かついえ あづち ながわはちろう えもん よ
間信盛、長光寺城には柴田勝家、安土城には中川八郎右衛門を置いて、浅井、六角の両氏に当らせた。 世
なだか びだん かめわりしばた ちょうこうじ ろっかくよしかた かこ おり
に名高い美談となっている壘破柴田の物語は、この時、長光寺城が六角義賢に囲まれた折の出来事です。

壘破柴田

おうみはちまん びんわり なまずえ
長光寺城は今の近江八幡市の東南約6 kmの小山(今の瓶割山)にあったもので、鯉江城はその東方約
12 kmのところがありました。 げんき よしかた よしすけ ちょうこうじ
元亀元年の5月21日から、六角義賢はその子の義弼と共に長光寺城を
しばた かついえ おけはざま たたか ぶこう くっし ゆうしょう
囲んだが、城将の柴田勝家は、桶狭間の戦いの以来、しばしば武功をあらわした織田家で屈指の勇将で
たので、城兵は極めて小勢ながら実によく守って、容易に城は落ちなかった。 けれども、城中には井戸が無
ろっかくよしかた ひみつ みづ て た こま
かったので、六角義賢がその秘密を知って、城外から引いていた水の手を絶ってからは大いに困った。

こ ろっかくよしかた ようす さぐ ひらい じんすけ
越えて6月3日のことです。 六角義賢は城兵の様子を探るために、平井甚介という者を使者として城
内に行って、いつわ わぼく もう こ かついえ さと めい
内に行って、偽って和睦を申し込ませた。 勝家も早くもそれと悟ったので、部下の者らに命じて、水にな
すこ ふじゆう ふるま じんすけ あん そうい こちち そし
ど少しも不自由していないようにと振舞わせた。 甚介は案に相違した心地がしたが、わざと素知らぬ顔を
こしょう よ てあら みづ すこ くだ かなだらひ
して、小姓を呼んで、「手洗い水を少し下さらぬか」といった。 小姓はすぐに大きな金盃に水をなみなみ
み かか じんすけ えん にわ
と満たして、二人で抱えて持ち出した。 そして甚介が使った残りの水をば、わざと縁の上からぱっと庭の

第16話 足利將軍の滅亡

しらすな す じんすけ ふじゅう おも こ かえ よし ほうこく
白砂の上へ棄てた。 甚介はいよいよ水には不自由していないものと思込んで、帰ってこの由を報告した。

よしかた いど ゆだん
義賢は、「それでは井戸があるのかもしれない。 中々城は落ちまい」といって油断をしていた。

かついえ じんすけ だま しら にこくい みづがめ
一方、勝家は甚介をうまく騙して帰したあとで、城中の水を調べてみると、ただ二石入りの水瓶に3つあるばかりでした。 これしきの水では逆も仕方がないと思ったので、彼は士卒をことごとく集めて、夜もすがら祝宴をして、明朝は一同打って出て討ち死にしよう、どうせ渴して死ぬよりは、最後の思い出に華々しく戦おう、心残りのないように、水をも飲めとて、十分に飲ました上で、件の3つの水瓶をことごとく槍の石突で叩きわって、いよいよ決死の覚悟をきわめました。

あ あかつき うすぐら かついえ てきじん お よ
明けて6月4日の暁、まだ薄暗いうちに城門を開いて、勝家が真っ先に立って敵陣に押し寄せた。ふい う つ くづ ろっかくよしかた から なまず え
不意を討たれて、六角方は一たまりもなく突き崩された。 六角義賢父子は辛くも逃げて 鯁江城に帰ったが、800余人はその場で討たれた。

かついえ かいしやう し のぶなが かついえ あた しょう
この勝家の快勝の知らせを受けて、信長は大いに喜んだ。 彼は多くの土地を勝家に与えてこれを賞したが、この時の感状の宛名を「甕破柴田殿」としたということです。 癩癩の強いので有名な信長にも、いちめん なご ひと ほほえ
一面にはこういう和やかな、人を微笑ませるようなところもあったのです。

姉川の戦い

さて、このすぐ後のことです。 のぶなが せいばつ いえやす えんべい
信長はいよいよ浅井氏を征伐しようと、三河の家康の援兵と共に、軍を近江に進めた。 ながまさ おだに せま ようがいけんご
先づ浅井長政の本城小谷山に迫って、しきりに戦いをいどんで見たが、城は要害堅固で容易に攻め難かったし、ながまさ な や のぶなが しりぞ
長政は鳴りをしづめて相手になろうともしなかったの、止むなく信長は退いて、あねがわ じんど
姉川の南に陣取った。 しかし一方、ながまさ よしかげ えんべい
長政も、やがて越前の朝倉義景の援兵が来ると、にわかに小谷城を出て、姉川の北に陣取った。

そこで、戦いは開かれた。 げんき のぶなが いえやす
元亀元年6月28日の明け方からです。 信長は浅井氏の軍に当たり、家康は朝倉氏の軍に向った。 むか ながまさ あんがい のぶなが せま
ところが、長政の軍は案外にもよく戦い、ついに川を渡って、信長の本陣に迫て来た。 しかしこの時、さいわ いえやす やぶ はし ながまさ よこ つ
幸いにも家康の軍が朝倉勢を破って、これを走らせて、更に長政の軍を横から衝突したために、やぶ ながまさ しりぞ
浅井氏の軍もまた敗れて、長政は小谷城に退いた。

この時、はしばひでよし いきお じょう せ よ もう で のぶなが
羽柴秀吉は、勢いに乗じて小谷城を攻め寄せようと申し出ましたが、信長は、急にこの城を攻めることの不利なのを察したのであろう、「身方も疲れている事だし」といって、ひでよし もち
秀吉の言葉を用いなかった。

てがら ほうび いえやす ぶこう しょう かんじやう
そして、手柄のあった者に、それぞれ褒美を与えたが、わけても厚く家康の武功を賞して、その感状には、ぶもん とうりやう とうどう こうき ひせう ながみつ かな あた
「武門の棟梁、当道の綱紀」と書き入れ、その上、褒美のしるしとして、特に秘蔵の長光の刀を与えたということです。 いえやす とく
いかに彼が家康を徳としたかがわかります。

のち のぶなが のぼ
かくして後、信長は京都に上った。

ところが、このころ、みよし ざんどう せつ お のぶなが はんこう
例の三好の残党らが兵を摂津に起こして、信長に反抗したので、今の大阪城のところに在った石山本願寺もまたこれに応じた、 あ いしまほんがん じ おう こうさしょうにん ちゃくし こうえ あさくらよしかげ むこ
本願寺の光佐上人の嫡子の光慧が、朝倉義景の婿だった

第16話 足利将軍の滅亡

ので、はるかに朝倉、浅井に身方したのです。それで、信長は同年8月、将軍義昭を奉じてその征伐に赴いた。

これを聞いて喜んだのは浅井長政です。この機会に乗じて、京都を襲い、信長の本拠をば覆してくれようと、急いで朝倉義景と謀り、自ら兵を率いて西近江に乱入した。そして織田氏の属城を突破して、京都近くまで攻め寄せた。

この知らせを信長は攝津で聞いて驚いたが、すぐに三好や本願寺に対する備えを立てさせると、自分は軍を率いて京都に帰り、忽ち浅井、朝倉の両氏の兵と近江の坂本で戦って、これを破った。両氏の兵は退いて比叡山に登り、延暦寺の僧兵といっしょになって固く守った。信長はしきりに僧兵を論じて、身方になるか、さもなければ中立になるようにと言い、そのいづれにも従わなければ、全山を焼き払うぞと言って嚇かした。しかし僧兵はついに彼のいうことを聴かなかった。そこで、包囲の策を立てて、兵糧攻めにすることにした。

山上では果たして間もなく糧食が欠乏して来た。それに、時候もしいに寒くなって来ているので、兵士らはこれにも困った。ついに朝倉方から将軍義昭に和睦の斡旋を頼みました。信長は聴かなかった。すると、正親町天皇もまた勅使を遣わしになって、両軍の和睦を命ぜられた。信長はすぐに畏まってお受けした。浅井、朝倉の両氏は勿論お受けした。そこで、先づ信長が囲みを解いて岐阜に戻ると、浅井、朝倉もまたそれぞれ領国に引きあげた。時に元亀元年12月13日でした。

比叡山の焼き討ち

けれども、これはただ一旦の和睦です。浅井、朝倉は延暦寺及び本願寺と結んで、どこまでも信長に反抗しようとしていたし、信長もまた、どうしても両家を滅ぼそうと決心していた。そこで、翌年になると、再び織田氏と浅井氏の間衝突が起こったが、この時、信長は敵の勢力を殺ぐためには、先づ延暦寺の僧兵を退治することが最も必要な事をつくづく痛感したので、浅井氏には羽柴秀吉を当たらせておいて、自分は柴田勝家らを率いて比叡山を囲み、火を放って延暦寺を焼き討ちにした。

勿論、僧兵は大いに防戦につとめたけれども、逆も織田勢の敵ではなかった。山王21社を始め、根本中堂、鐘楼、経蔵、院々寺々みな焼かれて、僧兵は悉く殺された。実に平安時代以来、長く横暴を極めた山法師も、一朝にしてここに亡びたのです。時は元亀2年、9月13日の事です。

こうして信長は、その翌元亀3年7月、再び兵を浅井氏に向けて、小谷城に迫った。ところが、たまたま甲斐の武田信玄が西上の途についたという注進があると共に、しきりに家康から援兵を求めて来たのと、一方、将軍義昭が、信長を除く計画をしていることがわかったのと、12月3日、にわかに浅井攻撃を中止して岐阜に帰った。

この時、信玄が遠江から三河に侵入して来て、ついに途中で病死した事は、すでに「上杉謙信と武田信玄」の話で詳しく述べておきました。

しかし、一方、将軍足利義昭はどうして信長を除こうとしたのでしょうか？

第16話 足利将軍の滅亡

あしかがよしあき はん
将軍 足利義昭の反

彼が将軍となる事が出来たのは、全く信長の力でして、大恩こそあれ恨みのあるべき筈は無いのです。さればこそ、一時は信長を「御父」とまでいって尊敬したのです。ところが、その後、信長の威名がますます高くなると共に、幕府の実権もまた次第に彼の手に移って行くと、義昭は、ついには自分の将軍職をも奪われはしないかと恐れたのです。そこで、信長に反抗する者らと謀を合わせて、彼を除こうとしたのです。

信長もこれには困りました。もとより義昭には何の勢力もないのですから、恐れるには足りないが、とにもかくにも将軍であります。今、四方に敵の多い中で、彼を相手に争うのは得策ではなかった。それで、先づ書面を送って、義昭の不心得を17ヶ条にわたって諫めた。しかし、義昭は反省しなかった。のみならず、天正元年正月から3月にかけて、彼は武田信玄、毛利輝元、朝倉義景、浅井長政らを始め、近江の六角氏、播磨の浦上氏、備前の宇喜多氏、河内の三好氏、松永氏、その他大小の豪族らを諭して、一挙に信長を挟み撃たせようとした。そして自分も兵を集めました。

事がこうまでなつては、信長も今は止むを得なかった。彼はその3月に急に兵を率いて京都にのぼり、義昭を二条城に攻めようとした。

ところが、この時にはまだどこからも援軍が来なかったのも、義昭は忽ち信長の勢いに恐れて和睦を請うた。信長は承知した。そして義昭に会って、いろいろと意見をした上で、誓書を取りかわして岐阜に帰りました。

ところがまた、7月になると、義昭は再び兵を挙げて、自分は宇治の槇島に陣取り、二条城には一部の兵を留めて信長が宇治に向かうのを、側面から攻撃させようとした。

室町幕府の滅亡

この知らせを受けると共に、信長はすぐに琵琶湖を船で渡って、二条城を攻めてこれを下して、転じて宇治の槇島に迫ってこれをも陥れた。将軍義昭は恐れて降を請いました。そしてある寺に入って、髪を剃って、坊さんになったが、信長はこれを再び京都には帰らさないで、河内に逐いやりました。時は天正元年（西暦1573年）の7月で、ここに室町幕府は名実共に、全く亡んでしまったのです。

正当な将軍義満からは13代、180年で、尊氏がほしいままに幕府を開いた時から15代、235年でしたが、この間、静かに治まった時といつては極めて少なく、殆ど乱世のみが打ちつづいたことはすでに皆さんの見て来たとおりで、最初に間違つて出来た幕府は、ついに最後まで碌でもなかったのです。

なお足利義昭はその後、河内から紀伊、播磨、備後と流浪して行って、暫くは毛利輝元の世話にもなったが、天正15年に大阪に出て来て豊臣秀吉に会い、その後は彼の保護の下に京阪の間に暮らして、ついに慶長2年8月、62才で亡くなりました。

（第16話 足利将軍の滅亡 終わり。次は前頁に戻り、第17話 織田信長の四方征伐へ）